

七八歳の頃

(幼稚園から低学年へ)

デュキー原著
大塚喜一譯

此譯文を草するに當り、倉橋先生から御懇篤なる御教示を賜つた所が少くない。茲に謹で謝意をする。

學校組織の一般的計畫に於て、兒童發達の三つの相に對應して仕事の三つの時期が注目せらるゝを常とする。其第一は、子供が彼の心を占有せる映像及び情緒の基礎の上に、直接的にして發動的なる活動に身を任せる時期である。そこには一方に常に身體的運動があり、他方に物語・劇・映像、即ち精神的全體なるものがある。しかも此兩者は互に分離せるものではない。兒童の意識に立入つて見れば、行動は觀念の實現を意味せずして、只自發的な湧出と發現とである。兒童の思想は、實現さるべき何物かではなく、又目的として未來に向つて投影せられても居ず、實に彼が爲す所の事その事に於て満喫する處の、活意義と活價値とを有するものである。それ故にこそ此時期は遊戯の時期と稱せられる。其生活の全體の方向が心像の現出へと向けられて居り、斯くて其心像に激動が與へられ人生に於ける一個の位置が

與へられる。

吾人が章を追ふて論じ來れる教育の四箇年間（四歳より八歳まで）の仕事は、子供の態度が顯著に此種のものである事の實際原理に基づけられてゐる。換言すれば、存在の爲に存在せる觀念から、心理的に手段と目的との分離せる事を本質とせる仕事、即ち要素とか階程とか行動とかの分離を本質とする仕事を強制するは尙早なりといふ原理に基づいてゐる。それ故六七歳の頃には讀書算には比較的少き且偶發的な注意が爲さるゝのみである。而して地理や科學に入門せんとする企は、分析的な形態學的な方法よりも寧ろ綜合的な生活的な方法が採用される。此事は、是等のものが「困難」であつて、子供は面白がらせねばならぬからではなく、又文明に於ける、及個人的發達に於ける形式と象徴との重要性が評價されてゐないからでもない。そは只子供の心的態度が此時期には、斯の如き仕事に必要なる程に特殊化してゐない事、且斯の如き仕事は行爲と觀念との分離を來して行爲を便宜的機械的ならしめ、觀念を遠大にして理解すべからざるに至らしむるからである。

しかし勿論、手段と目的とを意識的に關係せしむる事が此時期には全く缺けて居るとも、又後時期の發達を豫想する必要が無いとも思はない。之に反し、六歳の幼兒の意識にも幾分か縁遠き目的の或種のものが曙光を發し、其結果子供は目的に到達する爲に彼の行動を統制する事に興味を覺ゆるものである。

此態度の變化は、其結果が觸知し得られ且實際的のものゝ方、智的で抽象的なるものよりも一層容易に從て早く来る。例へば、子供が何かに用ひんが爲に箱を作る場合、又はランチに食せんが爲に穀物を料理する場合の方、或る將來の使用の爲あに読み算へ等するよりも遙に自然的に此事が行はれる。六七歳の幼兒の活動的構成的作業（前二章參照）はそれ故に、勢力の外的發動として子供に直接に現はるゝ所のものを秩序の方途に指導して掲げられたる結果に到らしむる活動を含む。此事は斯くして、目的に向つて働き、階梯の順序に從て彼方の何者かを達成する様に現在の作業を統制する所の習慣を形成する。是等の習慣は、更に意識的に考へられたる且遠き目的へと漸次に轉移せらるゝであらう。

八歳頃は丁度斯かる轉移の一が著しく見える。平均九歳に於ては、爲さるべき手段が不適當であると感ぜらるゝ結果に到達せんと企つる事を明かに好まない。子供は例へば前には喜を以て爲したる描畫の種類に反対する、それは彼が之を結果として見る故に未熟であり且不合理とさへ感じて、彼自身の現在の生活の一部分として感じなくなる。十歳に至れば、「何か困難なる事」即ち手段より目的への選擇と適應との中に力や効力を試し且呼起す如き何物かを屢々意識的に要求する。

それ故に此時期は、廣く云へば熟練即ち或種の「技術」の獲得の期である。勿論此種の技術は、描畫や音樂や讀書に於けると同様に地理や歴史にも適用せられる。其心理學的實體は達成せらるべき目的の精神的現存である。そは要求せらるゝ手段（要素・形式・象徵）を選択し分析し而して結果を得る爲に此

手段を用ふるに當つて規則的なる秩序・方法・「規則」に従ふ事を必要ならしむる所のものである。

然れども、特別なる方向に於ける容易と熟練とを得る所の技術の時期として此期を承認するに當つては、我々は或る根本原理に留意せねばならぬ。第一に、既に述べたる如く、成長は徐々である。子供は書く前に読み、數は其後に、且科學より前に總ての是等の題目が来る。此時期迄の基本教育に於ける科學の比較的僅かな成功は、其嚴密に智的なる方面の尙早なる強調であらうとは疑問とせらるべきである。吾人の経験によれば、八九歳の子供は科學の實驗的仕事に興味を有するが、そは彼等が先づ或る問題又は觀念を考へてゐて此實驗と問題を解き又は學理を試す方法と見做してゐるからではない。反之、斯かる興味は十三四歳に至つて漸く現はるゝものである。彼等は構成的仕事や料理を爲せると同様に實驗を取り扱ひ、其各段階又は順序に於て「何が起るか」を見聞する事が彼等の心を占領してゐる。又、歴史や文學に於ける専門的興味は後年に來るので、是等のものに於ては、想像され感受されたる全體に於ける興味即物語の形（十月號二七頁參照）は最も永く持續され且客觀的分析に抵抗するものである。

第二に、技術に於ける又は熟練を獲得する際の興味は、發達を阻止妨害せざらしめんが爲めには、實際的經驗の充分なる素地を要する。たゞ六七歳の子供が分析に對し形式や象徵や規則等への注意に對して心理的に用意しかけてはゐるが、彼等の中にて後者（規則）を用ひて前者（形式又は象徵）に全く餘念なく没頭する事が有利である程に生命的經驗の範圍を有する者は極めて稀である。故に、再言すれ

ば、注意は依然として如實の主題に向けられてそれにより子供の想像と思想との世界を廣め且深むる様ならしむべきであり、彼等の未だ得ざる経験を分析し又は彼等に何等人格的影響無き事物を爲すための規則を學ぶ等に注意を向くべきではない。

而して第三に、技術への入門は子供自身の経験内に起る目的に關連して來らねばならぬ、即ち欲求されたる目的として、且それ故に努力への動機として子供に現はれる目的に關連して來らねばならぬ。餘りに屢々假想される事は、教師にとりては目的を見るのみにて充分であり、而して勿論子供は今や或力を必要とする様になるのだから彼をして此力を得しむるには、此事が充分なる基礎であると考へらるゝ事である。しかしながら、最初の心理的要件は、子供は目的を彼自身の目的として又心要を彼自身の必要として見且感じてゐる事、及斯くして内からの動機即固有の衝動的動機を有し、それに依て分析を爲し「規則」即ち遂行の方法を獲得する事である。此事は仕事が形式的に活動的・構成・的發表的仕事と關連する事に依て、初めて可能となる。其仕事たるや困難を表はし是等を寫し出す有効なる方法を獲得する必要を暗示する所のものである。これは「相關」が此時期に於て發現する形式である。

教育者の目標が此時期に於て、子供をして或る力又は熟練を獲得せしむる事にあるとしても、以上の三原則に依て次の諸點が考慮されねばならぬ。即ち

(一) 急激の移動は行はれるものでない。

(二) 問題感と抵抗感の發生及びそれを解かんとする動機の發生に機會を提供せんが爲に、子供は尙やはり如實の主題に專心し、且直接的表現的で構成的なる話活動に從事する。

(三) 技術的練習は斯の如き材料から擇擇せられる。

尙其上に、周圍が完全であるが爲には

(四) 附加的な具體的材料又は作業は、子供が、彼の新しく獲得せる力を用ひ斯くして其價値を實現する所の結果の上に又は過程の中に提供せられる。

黒土や草履のうらも梅の花

一 茶